



闇長姫

モノローグボイスドラマ

静かな夜に包まれた、どこかの海沿いの街で。

それは灯籠流しの夜のことだった。

先祖の靈を弔（とむら）うため、海へと送り出されたいくつもの灯籠。それらは遠い陸をはなれ、あかあかとした灯（ひ）を照らしながら、黒い海の波間に静かに揺れていた。

風ひとつない穏やかな海。

突然、海の底から、たくさんの魚の群れが現れる。

その黒い魚群は、ひとつひとつがまるでシャチのように大きく、水面にヒレを叩きつけ、大きなしぶきをあげ、波間に揺れる灯籠を、我先にと食べ尽くしていく。とりわけ大きな魚が、風をきり、波をかきわけながら浮上してくる。

それは向こう、まだ水面（すいめん）の乱れていない海の中から、その向こう、まだ水面（すいめん）の乱れていない海の中から、

それは獲物を見つけた鮫のよう、黒い体で波をきり、すさまじい速さで近づいてくる。その背中には、手毬のような浮き球を抱えた、振袖姿の少女が佇んでいた。

黒い魚群が、まるで海面を暴れるように灯籠を食べ尽くしていく。魚に飲み込まれた灯籠は、一瞬その中で光を放ったかとおもうと、そのままふわっと、彼女が持つ浮き球の中へ、次から次へと吸い込まれていくのだった。

闇長姫。

それはいしにえの頃より、彼女はそうやつて、その光る浮き球の中に、魂を集めてきた。そして氣の遠くなるほど長い年月の間、それらを守り、やがてあるべき場所へとおくること。それが彼女の役目だった。

命は、最後に光を放つ。

太古の頃より、彼女はそうやつて、その光る浮き球の中に、魂を集めてきた。そして氣の遠くなるほど長い年月の間、それらを守り、やがてあるべき場所へとおくること。それが彼女の役目だった。

桔梗（ききょう）色の袖から覗く小さな腕を、彼女はすっと空へと掲げると、指でくるり、と小さく円をかく。

すると、水面を暴れる魚たちは群れをなし、その円に従うように大きな玉を作ると、また深く、海の底と潜つていく。

闇長姫はそのとき、彼女は後ろからやつてきた漁船に気付かず、船に頭をごん、とぶつけてしまう。

闇長姫はそのまま意識をなくし、ぶくぶくと海の中へ沈んでしまう。

両手に抱えていたその浮き球は、船にぶつかったはずみで僅かにひび割れ、そのまま闇長姫の手を離れ、ぶかぶかと夜の海を漂いながら、すぐ近くの防波堤へと流されていった。

穏やかな夜の海に浮かぶ、小さな防波堤。

その隅っこに座り、一人で海を眺める少女、ゆい。

灯籠流しのお祭りを見たあと、ゆいはこの場所で一人、ゆっくりと沖へ流れいく、いくつもの灯籠を、膝を抱えてずっと眺めていた。

そろそろ家に帰ろうと思った矢先。自分のすぐ足元の波打ち際に、何かぶかぶかと浮かんでいるものがあるのに気づく。ゆいは、防波堤のブロックの隙間を慎重に降りていくと、それを拾い上げる。

それはまるで、すずしげな金魚鉢の入れ物に飾るような、陶器でできた大きな浮き球だった。表面に少し欠けた小さなひび割れがある。

ゆいは顔を近づけ、ひび割れた小さな穴から、その中の様子を覗いてみる。浮き球の中には、真っ暗な闇の中に幾つもの炎が漂っていた。それは無数の生き物の形をとり、万華鏡のように絶えず変化していく。まるで宇宙のはじまりのようにな熱く、目が焼けてしまいそうなほど、強い力に満ち溢れていた。

ゆいはその浮き球がとても気に入り、拾い上げると、そのまま背中を向け、おかあさんの待つ家へと、駆け出していく。

闇長姫はその一部始終を、ただ海の中から、じつと見つめていた。

彼女は気絶した後、海の底でやつと意識をとり戻し、

自らの手を離れた浮き球を探しに、この港の近くまでやつて来ていたのだ。

水面から、少しだけ出した顔が、ゆいの姿をとらえる。防波堤を走るゆいの後を追うようにして、闇長姫は波間をちやぶちやぶと進んでいく。

ゆいの持つその浮き球を見ると、闇長姫思わず目を疑つた。

ゆいの手の中で浮き球が揺れるごとに、その欠けた穴からは、たくさんの魂が外に漏れ出しているのだ。

それらは外に出たかと思うと、瞬く間に、大昔のサメの祖先や、ノコギリのような歯をもつた、恐ろしい魚竜などに姿を変え、黒い大きな影となつて、悠々と夜の街を泳いでいくのだった。ゆいはそれに気づきもせず、うれしそうに浮き球を抱えながら、家へと続く路地へと曲がつていく。

大変なことになつてしまつた。浮き玉を取り戻すため、闇長姫はこれまで自分が一度も踏み入れたことがなかつた、陸の世界へと、恐る恐る一步を踏み出す。

海の世界とは違う、慣れない自分自身の体に、よたよたと足をふらつかせながら。ゆいが進んでいった、裏路地へと入る。その先に広がるのは、どこまでも続く大きなコンクリートの建物。はじめて見る、人間の都会の街だった。

あたりは群青色（ぐんじょういろ）の夜に包まれ、そこに人の姿はなく、ゆいの持つ浮き球から漏れだしたのであろう、色々な太古の海の生き物が、そこら中にはびこつていた。

自動販売機にたむろする、ウミユリの群集。後ろから、闇長姫の袖をかすめて通りすぎる、三葉虫やオウムガイ。

カンブリア記に海を制したであろう、名もなきあらゆる生き物たち。

突然、ふつと辺りが暗闇に包まれる。身構えると、頭上の空に、鋭いアゴをもつた魚竜の影が姿を現す。

闇長姫はあわてて、道の片隅にあつたゴミ箱の中に身を隠す。

我ながら、なんともなきあらゆる生き物たち。光の浮き球さえあれば、こんな魚など、かんたんに私の手の内に従えてやるのに。

頭上を悠々と泳ぐ、巨大な魚の影におびえながら。光の浮き球を追つて、闇長姫は、夜の街を進んでいく。



ゆいはようやく、住んでいる団地へと帰ってきた。

駆け足で上の階へと昇る。

ドアの隙間から、明かりがさしている。お母さんが仕事から帰ってきたのだ。

「ゆい、おかえり。灯籠流し見に行つてたの？」

お母さんの間に、ゆいはただ、こくりとうなづく。

ゆいはある事情から、言葉を自由に発することができない少女だった。

そしてさつき防波堤で拾った浮き球をお母さんに見せると、すこし得意げな笑顔を見せる。

「海で拾つたの？ 欠けているから、手を怪我しないように気をつけてね」

いつかお母さんにも、この浮き球の中に広がる、

不思議な生き物の世界のことを教えてあげようと、ゆいはそう思った。

深夜。六畳間の一室で、おかあさんと眠りにつくゆい。

ゆいは布団から顔を出し、畳の上に置いてある、さつき拾つてきた浮き球を見つめる。

それは時々、柔らかな光で、暗い部屋の中をぼうっと照らし、見たことのない不思議な生き物の影を見せるのだ。

布団の中で、わくわくしながらその様子を見ていると、

一匹の小さな魚の影が映る。

その魚は、浮き球の小さな割れ目から、ぴょんと外に出たかと思うと、そのままふらふらと泳いで、

玄関の扉の隙間から、団地の外の廊下へと泳いでいった。

ゆいは眠っている母親を起こさないようにそつと布団から出ると、その光る浮き球を抱えて、

小さな魚を追いかけようと、そつと団地の外へと飛び出していく。

※

団地の前までたどり着く闇長姫。

廊下の向こうから、小さな魚が、ゆらゆらと自分のもとに泳いでくる。

上へと続く吹き抜けを見上げる。

どうやら上の階から、生き物の影が広がつてきているようだった。

階段を上（のぼ）ると、やがて生き物の影の中に、海の恐竜のようなものが泳き始め、続いて、イルカやシャチが姿を現す。

それはまるで、生命の進化を辿っているかのようだった。

階段を登りきると、

廊下の向こうから、小さな魚が、ゆらゆらと自分のもとに泳いでくる。

それは夕べ、沖で灯籠の魂を集めの手伝つてくれた魚だった。

闇長姫が力を失つたことで、ずいぶんと小さくなつてしまつていたが、自分のことを見えていたのか、近づいてきてくれたことが、なにより嬉しかった。

そして廊下の向こうから。

浮き球を抱えて走つてきた、ゆいの姿が。

闇長姫は、大切な物を持つていつたゆいのことを、ひどく叱りつけてやろうと思った。

だがゆいは、小さな魚を操る闇長姫を見ると、嬉しそうにそばへとかけ寄り、

目を光らせて、彼女の手を、ぎゅっと握りしめるのであった。

どうやらゆいは、友達になりたいと思つたらしく、

嬉しそうにはしゃぐゆいを前に、闇長姫はゆいを叱ることもできず、持つていて浮き球を、取り上げる機会もなくしてしまう。

喋ることのできないゆいと、生まれながら言葉を持たない闇長姫。ゆいは闇長姫の手を引いて、魚の影が漂う、廊下の先へと進んでいく。

海の生き物で彩られた団地と一緒に見て回ろう、そう言いたいのだろう。

だがゆいは、廊下の途中で転び、持っていた光の浮き球を手放してしまった。浮き球は、そのまま階段を転がつていったかと思うと、パリン、という音が下から聞こえる。

浮き球は、大きなひび割れを作り、階段の踊り場で止まつていた。どうしていいか分からず、あわてて浮き球を拾いあげようとする、ゆい。

だが闇長姫は、その浮き球の影に、何か黒いものがうごめいていることに気付く。その黒い影は、すっと縦に伸びたかと思うと、背広を着た男の姿へと変わつていく。

背広の男の影は、目の前にいるゆいを見下ろす。

「ゆい：何をしている こっちに来るんだ」

ゆいは、その姿に見覚えがあった。

それは、かつて自分のおかあさんと喧嘩をして出て行つた、おとうさんの姿をしていた。

そして父親の影はゆいの腕を掴むと、

そのままゆいを連れ去り、どこかへと消えてしまう。

闇長姫は、その影を追つて、団地の外に出る。

外には、黒い霧のようなもやが、道を漂つていた。

ゆいを連れ去つた父親が、そこを通つていった証だ。

それは海のほうへと続いており、急いで後を追う闇長姫。

いつしか辺りは、真っ暗なもやに包まれ、雷雨が吹き荒れる嵐の夜へと変わつて

いた。

風が吹きすさぶ、嵐の海。

ゆいは、父親の影に手を引かれて、あの防波堤にいた。

父親はゆいの腕を掴んだまま、防波堤の先の、高波が押し寄せる海の中へ、

それは闇長姫のほうを睨みつけ、袖ごと腕を食いちぎろうとピラニアのようになぜかゆいを引きずりこもうとしていた。

いかかる。

必死に抵抗するゆい。闇長姫はゆいを助けようと、父親に近づく。

突然、父親の背中から、見たこともない大きな魚の化け物が姿を現す。

それは闇長姫のほうを睨みつけ、袖ごと腕を食いちぎろうとピラニアのようになぜかゆいを引きずりこもうとしていた。

闇長姫は、自らを龍の姿に変え、

黒い嵐を切り裂く、二体の影。

戦いの果てに、闇長姫はどうとう魚の化け物を打ち倒す。

魚の化け物は、そのまま黒い霧となつて散り、残つたわずかな一部が、そのまま海へと沈んでいく。

次第に嵐は収まり、黒いもやは晴れ、穏やかな夜の海が戻つてくる。

※

防波堤の上。そこには力付き、冷たいコンクリートの上に倒れる父親の姿があつた。

父親は、苦しそうにもがきながら、必死にゆいのほうに手をのばす。

「ゆい… 波に飲み込まれたらどうする…」

「そこは危険だ はやく…お父さんのもとに行くんだ…」

繰り返し言葉を訴えながら、手をのばす父親の姿。

ゆいは、その姿をよく覚えていた。

それは、2年前の嵐の夜。

ゆいが言葉を話すことができなくなつた、きつかけとなる出来事だつた。



2年前の嵐の夜。

母親と二人で暮らしていた団地に、もう長いこと会っていないかった父親が、突然、背広姿で訪ねてきた。

父親は母親に、封筒に入ったわずかばかりの慰謝料と、ある書類を提示する。

それは、父親のゆいの育児権を証明する書類だった。数年前にゆいの母親と離婚し、行方もわからなくなっていた父親が、ゆいを自分のもとに連れ戻すため、何らかの強引な手を使って手に入れたものだ。

父親は、ゆいの手を引く。部屋の中で、ただ立ち尽くす母親を置き去りにし、団地を後になると、ゆいを車に乗せようとする。

だがゆいは嫌がり、嵐の夜へと一人飛び出し、港のほうに逃げてしまう。

いつもの遊び場だった港には、黒い波が押し寄せていた。

その防波堤の先で、突然強い風が吹き荒れ、

ゆいはコンクリートのブロックにつかまつたまま、身動きがとれなくなってしまった。父親はゆいを呼び戻そうと、必死に手をのばす。

「ゆい、波に飲み込まれたらどうする！」

「そこは危険だ！ さあ お父さんのもとにつくるんだ…」

高波が防波堤を飲み込む。父親はゆいをかばい、そのまま引き潮にのまれ、黒い海の彼方へと流されてしまう。

荒れ狂う、真っ黒な海。沖の彼方へと消えていく父親の姿。

ゆいはただ地面に座りこみ、ただ茫然とそれを見ていることしかできなかつた。そこには、涙がこぼれていた。

その日の深夜。

たつた一人の娘を失い、キッチャンでうなだれる母親。きい、と玄関のドアが開く。

ゆいはただ、口をパクパクと動かすだけで、その口元からは空気だけが空しく漏れていく。

「ゆい、一体どうしたの！ お父さんは…？」

母親に抱かれるゆい。だが、その様子はおかしかつた。

ゆいはただ、口をパクパクと動かすだけで、その口元からは空気だけが空しく漏れていく。

ゆいはもう、何も喋ることができなくなつていた。

ゆいはクレヨンをとり、震える手で一枚の絵を書く。

それはぐぢやぐぢやな絵だったが、

真っ黒な嵐の海にさらわれて、遠くへ行つてしまつた父親の姿のように見えた。

母親は、ただ黙つてその絵を受け取り、再びゆいを抱きしめる。

もうそれ以上何も、ゆいに問いただすことはできなかつた。

防波堤のコンクリートに倒れたまま、ただ、ゆいのほうへ必死に手をのばす父親。

目の前に、怯えたゆいの姿が見える。

ぼやけた視界の隅に、何かが映る。
それは、見たこともない振袖の少女だった。

いや——俺はこの子を知つてゐる。

※

2年前の嵐の夜。

突然目の前が真っ暗になり、冷たい水の中で意識がまどろんでいく。
どれだけ時間が経つたのだろうか。
光も届かない、真っ暗な海の底で。

この子——闇長姫を見た。

ゆいが生まれてすぐ、
妻と3人で暮らしていた、幸せだった頃のことを。
気が付くと俺は、まるで生まれる以前にそこにいたかのよう、
暖かな浮き球の中で、ずっと夢を見ていた。

その後、何かの歯車がかみ合わなくなり。
互いの行き違いから、当たり前だと思っていた幸せが
音をたてて崩れ始めたことを。

記憶をたどるようにして、何度も思い返す。

もう少しだけ、自分が妻の苦しみを受け止めてやれば。
俺たちは、これほど苦しまずに済んだんじゃないのか。

3人で、ずっと幸せに暮らしていくたんじやないのか。

※

防波堤のコンクリートの上で。

肩を震わせ、立ち上がることもできない父親の姿。

その傍に身をかがめ、父親の肩にそっと手をおく、闇長姫。

「ゆいを、黒い海に連れて行つてはいけない。一緒に帰ろう。」

ゆいには、彼女が父親にそう語り掛けた気がした。

闇長姫は、茫然とゆいが持つていて、光の浮き球をそっと受け取る。
中の魂は、殆どが空になつており、表面には大きなヒビが入つていた。

ゆいは、はつとした様子で、泣きながら何度も頭を下げる。
大切なものを壊し、取返しのつかないことをしてしまったことを、必死に謝ろう
としているのだ。

浮き球は再び魂で満たされ、豊かな輝きを取り戻していく。
その表面には、ひび割れた線をなぞるように、金色の美しい模様が、徐々に現れ
ていく。

それは、欠けてしまつた陶芸を修復する、金繋ぎの技術のように、
壊れた浮き球を、より一層輝かせる力強さを放つていた。

几千もの生き物の魂が、ゆい達の回りを囲み、大きな渦を描いていく。
父親はただ黙つて、その渦の中へと飲み込まれ、消えていく。
その表情は、とても穏やかに見えた。

父親の口元が、かすかに動く。

その声は、渦に飲み込まれてしまいそうなほど小さかつたが、
ゆいはその言葉を、しつかりと聞き取ることができた。

涙でゆいの視界がぼやける。

涙をぬぐうと、気付いたらもう、そこには誰の姿もなく、
防波堤から見下ろす、いつもの穏やかな夜の海が、そこには広がつていた。

元の姿を取り戻した、静かな夜の街。

団地へと続くコンクリートの道を、とぼとぼと歩いてゆい。

団地の入り口には、お母さんが、息をきらしていた。

どうやら、部屋にゆいがいないことに気付き、外を探しに出ていたらしい。

「ゆい、一体どこに行つていたの！」

お母さんは、ゆいを抱きしめる。

「…お…かあ…さん」

ゆいの口から、かすかに声が漏れる。

それはとてもか細く、消えてしまいそうな声だったが、確かに、ゆいの口から発せられた声だった。

ゆいはその夜、つたない言葉で、

時間をかけて、お母さんに色々なことを伝えた。

2年前の夜のこと。

今日、防波堤でお父さんと会つたこと。

私達のことを愛している、と。

お父さんは、確かにそう言つていたこと。

※

その夜。ゆいとお母さんは、二人で小さな手作りの灯籠を作り、一緒に防波堤のほとりから流すと、海の向こうへいるお父さんへと、二人で手を合わせた。

ゆいは知つている。

私も、お母さんも、みんないつかは、終わりの時がやつて来るのだ。

そうしたらまたお父さんや、

あの不思議な女の子と、会えるときが来るのだろうか。

お父さんへの祈りを込めた灯籠は、そのままゆらゆらと沖のほうへ進み、遠くの波間にへと、やがて見えなくなつていった。

おしまい

◇クリエイティブモンズ写真素材◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

<http://free-images.gatag.net/>

ID:201202132000 ID:201208050000

ID:201101120100 ID:201503251800

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇